

篠塚先生と友人

絵を描くように私も時間をすごして70歳になってしまった。のであろうか。というように自分勝手にであるが簡単に解釈することもできる。一時期は仕上がったように見えたキャンパス上の絵もまたまた絵の具をぶっかけられて形がなくなって何が何やらわからなくなってしまう。人生は色々な解釈することができる。当然、解釈を超えたものもある。色々な解釈があり色々な事実がある。時間の流れが時代となり歴史となる。大海と一滴の露。これもまた無限にあってどれを選びとっていいか、実際に直面すると何にも分からない。それでいて誰でもが死去するまでは生きているという極く簡単な生涯がある。複雑であろうが簡単であろうが意識できないモノにとってはすべてのっぺらぼうとして一生がおわる。顔は、手、足、とにかく哲学がある。偶然に彼と会った。いや、会ったのではない。アメリカ版読売新聞に紹介されたニューヨークでの個展の記事をたまたま見て電話をくれたことから始まった。それも私がいなくてあとで私が追って結果的に1997年、所謂、昨年のパラダイスへの道に「ヒッピーの元祖(?) 桜井氏の個展に寄せて一/篠塚安夫」の一文となった。かれはまさに私にとっては哲学であった。勿論、私は哲学には興味はあっても所詮、素人である。にもかかわらず、こうして出会うことも哲学なのか。

ともあれ何故、彼と出会ったのか? 今、私は、所詮、私はこれを絵画と呼ぼう。第三者的に見ればどうなるのであろうか? すべて知る由がない。彼がいうソクラテスを一ソクラテスは一冊の本も持たない。もしかしたら一枚の絵も描かない画家があることも真理たり得る。しかし、ながら私は瞬間を惜しんで絵、あるいは描かないことの時間が不安であり地獄の一時のようキャンパスを絵の具で70歳にいたるまで飽きもせず塗りたくっている。勿論、絵と呼ばれようが、絵でなかろうが、大方、私にとっては関係なく見える。はたして、そうなのか、実生活として私の絵は無意識の世界に属している。そうして今、彼は興味つきない一点の光りである。別言すればイメージ、象徴、記号、手段としての絵の具なのである。私は「光り」を絵として定着させたいとおもう。ここにおいて、虚であったものが篠塚安夫先生となって絵として描く対象となってくる。そういう意味において無いものは描かれないし、見えないものは見えない。そしていま、描かれるべき彼がイメージとして明確に出来たとき、所謂、絵として「篠塚」先生が完成したとき、彼がいよいよ私が死のうが、全く関係なく存在し得る一枚の絵となる。篠塚先生のことを書くと私までなんだか哲学めいてくるから可笑的。

ともあれ、警官、坊主、教員の子供は往々にして虚栄心の強い変な人間になるという。他人はいざ知らず、私は全くその通りの男である。子供の時代から言われていたので、あとは破れかぶれヒステリックに自ら好んで転落していった。だからいまだに「転落」感が拭いきれずに澱んでいる。その転落感は私だけの特別のものと思っていたが少し角度をか

えると誰しもが持っていることが段々わかってきた。一番簡単なのは喧嘩の勝敗。この関係は国家間の戦争もまったく同じ型である。この簡単な原理が文明をも色濃く染め上げている。奴隷が女主人から愛されるとき奴隷には理解できないタブーが主人に派生する。そういうことにおいても、それぞれの「生」は制約され極度に生き難くなっている。それにも係わらず生きている。そして生きてゆく困難さを「楽々」と楽しく生きていると言い切る。「修行」なのか楽しく絵を描いてゆく。そういう意味において私は大嘘をつき出来もしないことを望んで70歳まで生きてきた。私はそれを絵と呼ぶのでしょう。こうして私は沢山の友人を得た。確かに私の感動は一人一人の友人に結び付く。篠塚先生の哲学には一人の人間として感動した。画家としてはもう少しゆっくりと小さい光を見つめることだと私にとっては嬉しい発見なのである。昔滞在したサンフランシスコの友人達の原稿はあり得ない白昼夢の花を咲かせてくれる。メルシー・ボク。